
猫又

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫又

【Nコード】

N3523F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

片思いに悩んでいる中学生片桐沙世。そんな彼女をペット、実は猫又のトラが助っ人を買って出て。中学生と猫の妖怪のほのぼのしたお話です。

第一章

猫又

片桐沙世はごく普通の女の子だ。街の中学校に通う本当に普通の女の子だ。

頭も顔も普通。背も体型も何もかも普通。平凡そのものの女の子だ。ぱっとしなないと言えぱっとしなない。そういう女の子だ。

だが誰にも一つは変わったところがある。それは彼女自身にはない場合もある。彼女の場合はそうであった。その変わったものというのは。家の飼い猫にあった。

「ふうん、大変だったんだね」

これまた何の変哲もない普通の中学生の女の子の部屋。ショートボブの沙世はピンクと白のトレーナーにベージュのキュロット、白いソックスという格好だ。問題はその沙世の側にいる猫にあった。

虎縞の猫である。それ自体は普通だ。だがその猫は。何と二本足で立ち、そして人間の言葉を話しているのだ。これがどうして普通であろうか。

「けれど何とか乗り切ったんだろう？」

「大変だったのよ」

沙世はその普通でない猫と平気な顔で話をしていた。ごく自然に。

「まあ皆で何とかしたからいいけれど」

「やっぱり持つべきものは友達だってことだな」

猫はその話を聞いたうえで満足気に頷く。

「いい話だ」

「まあ終わったからそう思えるわね」

沙世もそれに頷いていた。

「トラだってそう思うでしょ？」

「勿論」

トラと呼ばれたその普通でない猫もそれに応える。

「やってる時は何時でもそうだよ」

「そうなのよねえ。終わってからほっとしてね」
沙世とトラは話を続ける。

「後で大変だったなあって思ってた振り返って」

「俺なんかそんな思い出一杯あるぜ」

トラは笑って述べた。

「長生きしてるからな」

尻尾を振りながら言う。見れば尻尾が二本ある。猫又だ。

「どれだけ生きてたっけ」

「二百年さ。子供の頃に嬢ちゃんの御先祖様に拾われてな」

にこにこ笑っている。その顔はやけに猫らしいが何処か人間のそれも連想させた。

「それからずっとさ」

「そうだったわよね」

「親父さんもそれこそ赤ん坊の頃から知ってるしな」

「パパもそうなんだ」

「お袋さんがはじめて家に来た時なんてな。すごーい可愛かったからな」

「それよく言うね」

沙世の母親のことである。トラは二人の馴れ初めも知っているのだ。

「嬢ちゃんそっくりだったんだぜ」

「写真見たらそうよね」

「本当にな。結婚してすぐこうして話したら驚いたの何のって」

「私が逆に猫が喋らないって聞いて驚いたわよ」

「ははは、そうだな」

トラはまた笑った。

「普通猫って人間の言葉話さないからな」

「普通はね。あんた猫又だから」

「猫又だってちゃんとした猫だぜ」

トラは反論する。

「ちよつと魔力があつて尻尾が二本あるだけだな」

「それを妖怪って言うのよ」

「人間は悲しいねえ」

前足をまるで人間のその様に組んで嘆いてみせる。

「それだけで猫を妖怪呼ばわりなんだからな」

「二百年前は普通の猫だったんでしょ？」

「可愛い子猫だったさ」

「それがこんなになつちやつて」

「やれやれ、嬢ちゃんまで」

今度は前足をすくませる。そのまま人間の動きである。

「そんなこと言ってくれちゃつて」

「けれどお話が出来るのは有り難いわ」

「そうだろ、何しろ二百年も生きてるからな」

胸を大きくふんぞりかえらせる。

「何でも知ってるぜ。聞いてくれよ」

「阪神今度優勝するのは何時？」

「そんなのは神様に聞いてくれ」

「知らないじゃない」

「それは予言とかだろ。それにあのチームだけは何時優勝するかわかったもんじゃないよ」

「冷たいわね、ファンなのに」

「あのチームのファンってのはな、嬢ちゃん」

何処からともなく煙草と灰皿を取り出す。前足の爪から火を出して点けるとまず吸って煙を吐き出す。

「達観が必要なんだよ。何時勝っても負けてもな。喜ばなくちゃいけねえんだよ」

「わからないわね」

「西武ファンにはわからん話さ」

「松坂君が阪神に来たらどう？」

「ピッチャーはいいんだよ、阪神は」

ずっと阪神を見てきた猫の言葉である。その言葉には果てしない重みがあった。阪神という球団が伝統的に投手のチームであることを彼は熟知しているのだ。

「点が取れないと負けなんだ、野球は」

「ダイナマイト打線見てきたっていつも言ってるのに」

「そんなの毎日に潰されたさ」

これも見てきたから知っているのだ。二リーグに分裂した時に選手を多量に引き抜かれているのだ。これで阪神は大きく衰退している。

「私が生まれる前の日本一は？」

「遠い夢の話さ」

胡坐をかいて語る。

「もうな。あんな夢は見れないさ」

「これからも？」

「ああ」

彼は語る。

「いや、見れるかな。同じ位いいのは」

「それは何？」

「嬢ちゃんに恋人が出来ることだな」

彼は笑ってこう答えた。

「それでもその日を待ってるんだぜ」

「だってそれは」

だが沙世はこれにはバツの悪い顔をした。

「私まだ興味ないし」

「言うねえ、もういい年頃なのに」

トラは何処かおっさん臭い口調になっていた。どうやら阪神の話から地が出ているらしい。

「昔だったら嬢ちゃんの歳には嫁に行ってたんだぜ」

「けれど本当にいないから」

幾ら言ってもそれは変わりはないのだ。恋人というのは言ってもすぐできるものではない。何時出来るかわからないものなのである。「困ったもんだ。老い先短いこの身で嬢ちゃんの花嫁姿を見れねえなんて」

煙草を右の前足にとって溜息混じりに言う。

「唯一の心残りだねえ、また」

「何よ、阪神の日本一をもう一回見たいっていつも言ってるのに」「うっ」

沙世に突っ込まれて言葉を詰まらせる。

「それに後何百年も生きるんでしょ、猫又って」

「ま、まあそうだけだよ」

言われてしまっってはどうしようもない。

「だからそのうち見られるわよ。安心してよ」

「いや、安心は」

とても出来なかった。どうしても沙世のそっちへの疎さが気になるのだ。だがそれを言っても何にもならないのも自分で嫌になる程わかってしまった。

（まあいいか）

トラは心の中で呟いた。煙草を前足に持ちながら。

（いざとなりゃこの俺が何とかしてやるか）

そんなことを考えていた。だが沙世は相変わらずで何の変化もない。トラは阪神の勝ち負けに一喜一憂しながらそんな彼女を見守っていた。

そうした日が続いていた。ある朝。教室でぼんやりとホームルームを聞いていた沙世に突然異変が舞い降りてきた。

「転校生だぞ」

担任の桐生先生がいきなり言い出した。

「えっ!？」

「転校生って!？先生」

「転校生って言ったら転校生だ」

沙世のクラスの担任の桐生先生はかなり強引な先生として知られている。野球部の顧問で自分で応援歌を作り卒業写真で部員全員でポーズを決めたり何でも気合で済ませようとする。そうしたいかした先生であり生徒からの評判は実にいい。また違った意味で。

「わかったな」

「何でいきなり言うんですか!？」

生徒達の意見は続く。

「面白いだろ」

「面白いって」

「いきなり言った方がな。それでその転校生だ」

「またあの先生は」

沙世はそんな先生を見ていささか呆れ顔であった。いつものこととはいえこうした悪戯に呆れさせられたり困ったりしているのもまた事実だからだ。

第二章

だがそんなことを考えている間に先生は動いていた。教室の前の扉を開けその転校生を招き入れる。

「おう、こっちだ。入れ」

「はい」

男の声だった。それを聞いた男子生徒達は落胆の声を、女子生徒は期待の声をあげた。

「何だ」

「どんな子かしら」

見事に好対照であった。その対照の中でも沙世はぼんやりとしたものであった。

「どうせ転校生っていつでも」

自分と同じだと思っていた。だからといって足が三本あるわけでも身長が三メートルあるわけではないのだ。普通の人間に決まっているのだ。決まっていけない方が恐い。だから彼女は別に何の期待もしていなかった。

しかしそれは。大きく裏切られることになった。

「えっ」

やって来たのは沙世の好みそのままだったのだ。背が高く髪は黒い。眉は濃く、顔立ちはしっかりとしている。何処か日本人というよりはラテン系、しかもイタリアの匂いがする少年だったのだ。

「嘘、凄いハンサム」

沙世にとってはそうであった。好みが分かれる顔であろうが彼女にとってはもうこれ以上はないという程の美人であった。

「若松澄也君だ」

先生は彼の名前を紹介した。

「御両親の都合でこちらに転校することになった。宜しくな」

「宜しく願います」

当人も挨拶をした。その声がテノールで高い。それもまた沙世の好みであったのだ。何もかもが彼女の理想であったのだ。心奪われるのも当然であった。

「あんな子が来るなんて」

うっとりとして見ている。だがそれには誰も気付くことなく普通のホームルームを送っている。ここで先生がふと言った。

「席は…….…….とおおあった」

ここで気付いた。

「片桐の隣がいいな」

「私の隣の席なんか…….…….それは無理かな」

「おい片桐」

「けれどたまたま空いてるし。まさか」

「片桐っ」

「あっ、はい」

先生の声にやっと気付いた。

「何をぼうっとしているんだ」

「す、すいません」

「気合が足らん。朝からそんなことでどうする」

先生の決まり文句が出た。この先生は朝からどころか二十四時間気合を言うのである。ある意味非常にわかりやすく面白先生である。

「気合が入ったな」

「はい」

「じゃあ若松君が隣になるからな。宜しく教えてやってくれよ」

「えっ、私の隣ですか!？」

「何だ、聞いとらんのか」

「あっ、いえ」

何か顔が急に赤らんできた。

「あの、それはその」

「そこが空いてるからな。不満でもあるのか？」

「別にないですけど」

「じゃあ決まりだな」

話は沙世があれこれ応えている間にも進んでいく。

「何かわからんことがあればこいつに聞いてくれ。いいな」

「わかりました」

「片桐もそれでいいな」

「はい」

顔を真っ赤にしてまた応える。

「宜しくお願いされますです」

「こら、文法が変だぞ」

「す、すいません」

そんなこんなでホームルームが終わり転校生の若松澄也は沙世の横に來た。その席に座る時にそっと沙世に挨拶をしてきたのであった。

「宜しくね、片桐さんだったっけ」

「え、ええ」

顔は真っ赤なままだった。その顔で応える。

「宜しく」

「何かあったらお願いね。來たばかりだから」

「こちらこそ。宜しくね」

「うん」

その日はずっと顔が赤いままであった。沙世は何と言っているかわからずずっと赤い顔のまま学校で過ごした。学校が終わって家に帰ってからも大変であった。

「ふうん、転校生か」

「そうなのよ」

やっと落ち着いてきてトラに話をする。

「すごいハンサムで。格好いいのよ」

「そんなに？」

「はじめて見たわよ」

また顔が赤くなった。

「あんな子。素敵なんだから」

「成程ねえ」

「何か声もかけられないのよね。色々教えてやってくれて先生に言われてるのに」

「じゃあいいじゃないか」

トラはそれを聞いて言う。

「教えてあげれば。先生からのお墨付きなんだろう？」

「それはそうだけど」

だが沙世の顔は晴れない。

「けれど・・・ねえ」

塞ぎ込んだ顔を見せてきた。

「そういうわけにはいかないのよ」

（ははあん）

トラはそんな沙世の様子を見てすぐに何かを見抜いた。

（嬢ちゃんも遂にか）

心の中で笑みを浮かべる。それから何気ない様子で言った。

「先生の言いつけはもらえないとな」

「わかってるわよ、それは」

沙世は答える。

「けれどね、何か」

「じゃあいいことを教えてやるよ」

「いいことって？」

「話す前にな、手の平に人って文字を書くんだ」

トラは沙世にそう教える。

「そしてそれを飲み込む動作をするんだ。そうすればいいんだよ」
「どうなるの？」

「人と話せるようになるんだ。その転校生とね」

「それっておまじない？」

「いや、魔法さ」

トラはここであえて嘘を言った。

「猫又の妖術って言うのかな。そんなところさ」

「魔法と妖術じゃかなり違うんじゃない？」

「原理は同じものさ」

これはある程度は本当であつた。どちらにしろ普通の人間には扱えないものだ。

第三章

「だから効果はてきめんだ」

「そうなの」

「安心していいってことさ」

沙世の目を見て言った。ここでは本当に魔力を使った。

「いいね、嬢ちゃん」

「ええ」

目を見たその瞬間に魔力を使い沙世に言い聞かせる。沙世はその瞬間にトラの妖術を受けた。トラはそれを心の中で確かめながらまた言った。

「明日、まず声をかけるんだ」

「明日……」

沙世の目はまるで夢遊病患者のようになっていた。魔力が効いている証である。

「校内を案内するって。それもまだなんだろう？」

「ええ、ただだけど」

虚ろな目のまま答える。

「だったら丁度いい話だ」

「声をかけるには」

「そうさ。全てはそれから始まるから。いいね」

「ええ、わかったわ」

こくりと頷く。それで魔力を一旦消した。

「これで魔法は伝えたよ」

「それだけなのね」

沙世は元に戻っていた。焦点がはっきりした目で問う。

「そうさ、大船に乗ったつもりでな」

「わかったわ、じゃあやってみる」

「けれど周りに気付かれないようにそつとな。仮にも魔法なんだか

ら」

「だから妖術でしょ、これって」

「そんなのはどうでもいいって。とにかくそれを使えばいいからさ」

「うん、それじゃあ」

沙世は頷く。これでトラの方の手筈は整ったのであった。

次の日の朝。沙世はまずトラに言われたことをした。

「ええと」

誰にも気付かれないうように手の平に人の字を書く。そしてそれを飲み込む動作をした。

「よし」

意を決して澄也に向かう。勇気を出して口を開く。

「あの、若松君」

「何？」

あのテノールの声とはつきりとした顔が沙世に返ってきた。それだけでもう心臓が止まりそうになる。だがそれを抑えて言葉を続ける。

「今からさ、校内見て回らない？」

「学校の中を？」

「時間あるしさ。どうかな」

「案内してくれるの？」

「ええ」

平静を装って答える。

「昨日来たばかりでよく知らないと思うから。どうかな」

「有り難う」

澄也はまずこう返事をした。

「えっ!？」

「だから有り難うって。一緒に来てくれるんだよね」

「え、ええ、まあ」

少し戸惑いが見えそうになるのが自分でもわかる。慌ててそれをしまいこむ。

「それでいいわよね」

「うん、じゃあ今からだね」

「そうよ。じゃあ行きましょう」

澄也は立ち上がり沙世の側に来る。高い。女の子の沙世から見て
もかなり大きかった。

「背、高いのね」

「うん、まあ」

沙世を見下ろす形で答える。

「中学校になって急に伸びて」

「へえ、そうなんだ」

「もう服がすぐに着れなくなってね。困ってるんだ」

「そうなの。何か羨ましいなあ」

「羨ましいの？」

「だって。背が高いのって」

これも彼女の好みなのだがやはり言えない。どうにも言うに言え
ないことばかりで困ってしまう。

「いいじゃない。格好よくて」

「ありがと」

澄也はその言葉を聞いてまた礼を述べた。

「そう言ってもらえると嬉しいよ」

「だって本当のことだから」

自分でもどうしてこんなことまで言うのかわからなかった。魔法
のせいだと思うがそれでも口が自然に話す感じであった。そのこと
に自分でも困ってしまう。

「それでね」

「うん、行くんだよね」

「ええ、行きましょう」

沙世が声をかけて案内をはじめる。二人は並んで廊下を歩きはじ
めた。

そんな二人を窓の外から見る影があった。トラであった。

「まずは順調にはじまったかな」
沙世を見て言う。

「けれど嬢ちゃんも中々」

そう言っただけで笑う。

「積極的だね。奥手とばかり思ったけれど。それじゃあ」

その場を動く。そして姿を消して何処かへと向かった。

沙世は澄也を案内していく。中々広い校内であった。

「で、ここが体育館なのよ」

「広い体育館だね」

「そうかしら」

「僕の前の学校のより大きいよ」

彼は言う。

「ずっとね」

「ふうん」

「バスケの試合もやりがいがありそうだね、こんなに広いと」

「そうなの」

「うん。ほらさ、やっぱり広い方がいいじゃない」

これは沙世にも何となくわかることだった。やはりやるからには狭い場所より広い場所の方がいい。そうした気持ちはあまりスポーツには興味がない彼女にもわかることだった。

「だからね。ここで試合出来ると思ったら嬉しいよ」

「じゃあここでもバスケ部に入るつもりなの？」

「バスケ部あるんだよね」

「ええ、あるけれど」

「じゃあ入りたいな。それで」

体育館を見ながら言う。

「ここで試合とか練習したいね」

「じゃあ入るといいわ」

沙世は答えた。

「私もここ部活で使ってるけどいい体育館よ」

「バスケ部？」

「いえ、演劇部」

実は沙世は演劇部なのである。

第四章

「舞台でリハーサルとかやるから」

「ふうん、色々使うんだね」

「色々使えるのよ。こう言えばいいかな」

「いいね、それって」

沙世の言葉に応えてにこりと笑った。その顔を見てまた沙世の心が動く。同時に心臓も。

「いいかしら」

「色々使える体育館ってさ。やっぱりさ」

「そうよね」

心臓の音がドキドキしているのを感じながら応える。それを隠すのにまた努力をすることになった。

「何か楽しみになってきたよ」

「ここ使うのが？」

「うん、じゃあバスケットに入ろうか」

「それいいと思うわ。ただ」

「ただ？」

「演劇部も足りないけれど」

（あれっ）

それを言ったところで自分ではたと気付く。

（私何でこんなことを）

また魔法のせいかと思ったがそれは違っていた。秘密は天井にあった。

「これでよし」

そこにはトラがいた。彼が魔法で言わせていたのである。

「この言葉で大きく動くぞ」

まだ子供の沙世よりはこうしたことはよくわかっている。伊達に二百年も生きているわけではない。この一手が大事だと見越したう

えでのことであつた。

「そうなんだ」

トラの読み通りであつた。澄也がその言葉に顔を向けてきた。

「ここの演劇部って人が足りないんだね」

「女の子はそうじゃないけれど」

一手で流れを汲まれるとそれに乗っていかざるを得なくなる。沙

世は戸惑いを必死に隠しながら彼に応える。

「男の子が。それで何かと困ってるのよ」

「役が限られてるんだね」

「お芝居も。私がズボン履いてやることだってあるのよ」

「ズボンを？」

「ええ。それで男の子の役やったり」

これは劇ではよくやることである。オペラではモーツァルトやリヒャルトⅡシュトラウスのオペラでよく見られる。若いソプラノやメゾソプラノの歌手が男の子の役を演じるのである。フィガロの結婚のケルビーノやばらの騎士のオクタヴィアン等が代表である。これで人気が出る歌手も多い。

「しているんだけど」

「成程ねえ」

「よしよし」

トラは体育館の上から澄也の顔を見て満足気に頷いている。自分の一手が望む方向にいつていることを見てそんな顔をしているのである。

「いいぞ、そのままだ」

「だったらさ」

「ええ」

「さあ言うんだよ少年」

澄也と沙世を見下ろしながら言う。

「その言葉を」

「僕、演劇部に入っているかな」

「えっ!？」

「よし」

その言葉を待っていた。全ては思い通りであった。

「本当なの!？それ」

「男の子が足りないんだろ」

澄也はもう一度それを確かめる。

「ええ、まあ」

沙世は今度は戸惑いを隠せてはいなかった。目を丸くさせてそれに頷く。

「だったらさ。いいかな」

「私はいいけど」

「よし、そこだよ」

トラは沙世がいいけど、と言ったところで前足で力瘤を作った。

「そこでドカンと」

「じゃあ部長とお話してね」

「うん」

「ちえっ」

思いの外押しが弱くそれに肩透かしを食わされる。

「そこでやらないと」

「それで決めましょう」

「うん、そうさせてもらうよ」

「これはまたの機会だな」

トラは屋根の上に寝転がって呟いた。右の前足で頭を支えて横に寝ている。

「じゃあ次は何処かな」

「あっちの校舎よ」

「うん、じゃあそっちにね」

「ええ」

二人はそのまま向こうの校舎へと歩いていく。それで今回の話は終わった。少なくともトラの思うようにはいかないで終わってしま

ったのであった。

「やれやれ」

トラは姿を消した。そして何食わぬ顔で家に帰って来た沙世と話をするのであった。

「ねえねえ聞いてよトラ」

「どうしたんだい、嬢ちゃん」

トラはこの時リビングのソファーにあぐらをかいて新聞を読んでいた。読んでいるのはスポーツ欄でありそこには阪神の連勝のことが書かれていた。

「昨日来た転校生だけどね」

「ああ、そういやそんなの言ってたな」とどけて応える。

「で、それがどうしたんだい？」

「演劇部に入るって言ってるのよ」

沙世は鞆を置いて制服のままトラの向かい側に座った。そして話をしている。

「演劇部にね」

「そうなのよ。うち丁度男の子少なかったし」

「それだけ？」

トラはここで新聞から目を離して沙世に問うてきた。

「えっ!？」

「だからそれだけって。部に人が来て嬉しいだけなのかい？嬢ちゃん」

「えっと、それは」

（本当に嘘が下手だな、こりゃ）

トラは沙世を見て内心想った。これで演劇部というのもどうかとさえ考えるがそれはあえて言うことはなかった。

「お友達が増えて嬉しいってところかな」

「えっ、ええそうなの」

沙世は咄嗟にそう答えて誤魔化した。

第五章

「ほらね、やっぱり人が多い方がね」

「そうだよなあ」

トラは目を細めさせてきた。

「阪神が強いのと友達が多いのは実にいいことだよ」

「阪神の方が先なのね」

「だから言ってるじゃないか。俺にとって阪神は浪漫なんだ」

「ロマンじゃないの？」

「その言い方は無粋だぜ。言い方はやっぱり明治だよ」

「明治には阪神タイガースなかったんじゃ」

「まあそれはそれ、これはこれだ」

彼はそれは誤魔化した。

「けれどまあ、友達が増えるとな、いいことがあるさ」

「そうよね」

「とりわけ男の子の友達はな」

「それどういうこと？」

「言ったままさ」

言葉にある裏の意味は言わなかった。

「そのまま。まあそれはおいおいわかるさ」

「ふうん」

「で、その転校生だけどさ」

トラは何も知らないふりを続けて尋ねてきた。

「仲いいみたいだね」

「やだ、そんなのじゃないよ」

それを言われると顔を急に真っ赤にさせてきた。やはり嘘が下手な娘であった。

「昨日会ったばかりよ、それで」

「それでもこうしたもないものさ」

トラは達観した様子で言った。新聞を置いて煙草を出す。そこに火を点けて言う。

「人の付き合いってやつはね」

「そうなの」

「急に仲良くなったりするものさ」

「だからそんなのじゃないって」

沙世はまた言い返す。

「だから私はそんな」

「そうなんだ」

「そうよ」

真っ赤な顔のまま言っても何の説得力もなかったが表向きは納得することになった。

「別にそんな」

「ふうん」

トラは煙草を吸って煙を大きく吐き出した。ソファアの上に胡坐をかいてそうする仕草が猫だというのにやけに様になっていた。そいじよそこいらの人間よりもである。

「まあとにかく演劇部に男の子が一人入りそうと」

「そういうこと」

「よかったじゃないか、それは」

あらためて言う。

「で、どんな役やれそうなんだい？」

「役とかは別にまだ」

沙世のいるこの学校の演劇部は一年でも芝居に出られるのである。部員が少ない性もあるがそれはそれでいいことであった。だから彼女もズボン役をしているのである。

「まだ正式に入ってもいないし」

「まだこれからってわけか」

「ええ」

こくりと頷いた。

「主役だといいね」

「まあ主役の男の子も足りないし
とにかく人が足りないのである。

「脇役もそうだけれど」

「じゃあすぐに出来るな」

トラはそれを聞いて言った。

「それで嬢ちゃんと共演だ」

「共演!？」

「そう、若しかしたら主役とヒロインなんてのも」

「だからそれは」

また顔が真っ赤になっていた。

「決まってもいないから」

「何事もこれからと」

「そうよ。からかわないでよ」

「御免御免」

煙草を手にとって目を細めて笑った。猫とは思えない笑顔であつた。

「じゃあ何かあったらまた言ってくれよ」

「ええ、そうするわ」

「応援するからさ」

「何を？」

「お芝居の方さ」

（おっと、今のは結構鋭かったな）

表の顔と素顔で違うことを思った。

「じゃあ頑張ってたな」

「有り難う」

（さてと、次に仕掛ける時は決まったな）

トラは煙草を吸ってにこやかに笑いながら思った。

（芝居の時だな。多分それはもうすぐだ）

人の少ない部である。それならば。

（その時動くとするか）

今は煙草を吸い続けた。新聞を眺めながら。そこにある阪神の勝利の話を何度も見る。そして勝利の味を噛み締めるのであった。トラにとっては至福の時である。負ければ負ければで何かがある。阪神を応援するということはやはり浪漫なのであった。ある芸能人がそうであるようにだ。

阪神の試合を観ながら日々を過ごしているとまた沙世から話があった。

「ねえねえ聞いて」

「何だい？」

トラは今はテレビを観ていた。観ているのはやはり阪神の試合である。

「丁度今いいところなんだけれど」

「うわ、凄いわね」

沙世はテレビに映る試合を観て思わず声をあげた。

「中日ノーヒットノーラン寸前じゃない」

「どうなってるんだよ一体」

トラは無然としていた。

「何で今年は中日ばかりに負けるんだ!？」

トラはビール缶を片手に不平を漏らす。

「おかしいじゃないか、しかも名古屋ドームで」

「だってうちの監督落合さんなんだもん」

沙世はにこやかに笑って言う。実は彼女は中日ファンで落合監督が好きなのである。その采配と笑顔がいいというのが彼女の言葉である。

「負ける筈がないわよ」

「ちえっ」

トラは無然として画面を観ている。

「このピッチャーも息が長いな」

「そうよね」

「まさか今になってこんな目に遭わされるとは思わなかったよ」

目の前で阪神のバッターのバットがスクリーンの前に空しく空を切っていた。それがトラの目には阪神の数え切れないまでの絵になる敗北として映っていた。

「それにしても。またナゴヤドームか」

「今年はずちの守護神よ」

「こっちにとっちゃ疫病神だよ」

猫又としての誇りも魔力もそこにはなかった。

「魔物は甲子園にだけいるんじゃないんだな」

「名古屋ドームのは守護神よ」

「全く。いい加減にしてもらいたいよ」

もう九回で今にも終わりそうである。こうなっては負けは明らかであった。

「で、何があったんだい？」

トラは野球から沙世に気持ちを向けた。もっともまだ野球を観ているのだが。

「部活だけね」

「落合の野郎が客に来るんなら崇りに行ってやるよ」

「いや、そうじゃないから」

「そうかい」

無論これは冗談である。トラは中日は嫌いではない。嫌いなのは何と言っても巨人である。とりわけ関西出身のOB二人とフロントは死ぬ程嫌いである。前の監督も嫌いで辞任した時は酒盛りをしていた。

「で、部活で何があったんだい？」
沙世に問う。

「うん、今度のお芝居ね、何するか決まったの」

「ああ、そうなんだ」

意外と普通であった。話しているうちに阪神のことが頭から離れていって落ち着いてくる。妖怪でさえ狂信者にさせる、それこそが

阪神の恐ろしさなのである。

第六章

「で、何？」

「何でオペラが元らしくて」

「ふん」

「愛の妙薬っていう作品なのよ」

「ああ、あれね」

トラはそれがどういった話か知っていた。

「知ってるの？」

「ほら、よくパヴァロッティって歌手がテレビに出てるだろ」

「太って髭だらけの顔のあの外人さん？」

「そう、その人。その人が得意なやつでね」

「そうなの」

「面白い話だぜ。それで何の役なんだい？」

「アディーナっていう女の子」

「おっ、主役か」

「そこまで知ってるの」

「浅草じゃよく観たからな」

トラは自慢げに述べた。

このオペラはドニゼッティが作曲した喜劇である。村娘アディーナに一途な想いを寄せる村の青年がインチキ薬売りの惚れ薬を買って引き起こすドタバタ劇である。曲がよいのとドタバタしながらもホロリとするストーリーで今でも人気がある作品である。ドニゼッティの代表作の一つでもある。

「ストーリーはもう知ってるかな」

「台本は見せてもらったわ」

「じゃあいいや。それでさ」

「ええ」

「嬢ちゃんがアディーナなんだよな」

「そうよ」

沙世は答えた。

「で、問題は主人公だ」

「あの男の子ね」

「そう、ネモリーノ」

この作品の主人公でありパヴァロッティの十八番でもある。多少どころか全く頭が回らないが純朴で人のいい一途な村の青年である。

「彼は誰があるんだい？」

「それがね」

（ははあん）

急に俯いて顔を赤くさせる沙世を見てすぐにわかった。

「若松君なの」

（やっぱりな）

その様子からすぐに察しがついていたが沙世から直接それを聞いてそれが事実だとわかり納得する。

「いつも言ってるけどうちの部って男の子少ないから」

「それでか」

「うん」

「じゃあ嬢ちゃんとカップルなのか」

「そ、そうよね」

そこを突かれて顔をさらに赤くさせる。なおこの作品はハッピーエンドでありネモリーノはドタバタの後で晴れてアディーナと一緒にになれるのである。

「そうなるわよね」

「それでどうなんだい？」

トラは問う。

「やる気あるかい？」

「も、勿論よ」

真っ赤な顔のまま言う。

「だってお芝居なんだし」

それだけじゃないだろうに、と心の中で思ったがそれはあえて言わない。

「やるわ。ヒロインだし」

「よし、じゃあ頑張るな」

トラは目を細めてそう声をかける。

「精一杯な」

「ええ」

沙世は強い目で頷く。

「私やるわよ」

（それでもう一つの方もな。頑張るなよ）

決して口には出さないがそちらへのエールも忘れない。だが沙世にエールを送っているうちに阪神の方は大変なことになってしまっていた。

「あつ、試合終わったわよ」

「勝ったか!？」

「中日が」

「ちえっ」

その言葉は聞きたくもないものだった。

「しかもノーヒットノーランよ。マジックも減ったし」

「何なんだよそれ」

流石にこの事態には怒りを露わにする。

「斉藤や桑田が一番凄い時でもそんなのなかったぞ」

完封負けはしょっちゅうでもヒットの一本や二本は出ていたのである。あのどうしようもない暗黒時代、草野球以下とまでこきおろされ、高校野球の優勝チームの方が強いとまで言われていたあの時代でもだ。だが今日はどうしたのか。何とも絵になる敗北であった。

「やられちゃったね」

「何かの間違いだこれ」

にこにことしている沙世にムキになって反論する。

「何でこんな時期にノーヒットノーランなんだよ」

「だって中日なんだから」

「ナゴヤドームが悪い」

トラは主張する。

「あの球場には絶対に何かある」

「巨人に負けた時には東京ドームに言っていなかった？」

「まあそれは」

「それでヤクルトに負けた時はキャッチャーが超能力でボールを操作しているとか」

およそ妖怪とは思えない発言である。

「他には何があったっけ。マシンガン打線と大魔神がどうか」

「うう……」

「鯉は食ってやるとか言って鯉こくも食べてたよね」

とかく全ての球団に見事に負け続けていたのがかつての阪神であった。その負け方が素晴らしかったのだ。縦縞のユニフォームは勝利と同じ位の敗北が似合うのである。

第七章

「ナゴヤドームだけじゃないよね」

「まあ気にしないでくれよ嬢ちゃん」

勝てないので誤魔化しにかかってきた。

「それで部活は頑張るんだよね」

「勿論」

「阪神もそちらも応援させてもらうからな。頼むぜ」

「もう野球の方は中日の優勝で決まりだけれどね」

「それを言わないでくれよ」

目の前で喜びに包まれる中日ナインと怒りに燃える阪神ファン。そのコントラストが今二人にも見事に重ね合っていたのであった。芝居の練習は続きやがて本番目前となった。

「いよいよ明日なのよ」

「はじめてなんだよね」

「うん、初演」

沙世とトラはまたリビングで話をしていた。今度はジュースやお菓子を食べながらである。

「皆頑張ったし。上手くいきたいわ」

「あの男の子はどうなんだい？」

「いい調子よ」

にこりと笑って答える。

「お芝居も上手いし」

「それは何より」

「それにね」

顔が赤くなった。トラの予想通りだ。

「格好いいのよ」

「あれはそんな話じゃないんじゃない？」

愛の妙薬は喜劇である。それで格好よいも何もない。むしろ少し

以上に抜けていて間抜けなのが主人公のネモリーノ役に相応しい程である。パヴァロッティはそれがよくわかっている。

「それでもよ」

完全にのろけていた。

「背も高くてね。舞台の衣装に似合ってた」

「まあそれはそれでいいけれど」

「いい感じなのよ、凄く」

「かなり人気出そうだね」

「うん」

沙世もそれを認めた。

「多分うちの部にとって凄いものとなるわ」

「それはいいことだね」

トラはコーラを飲みながら応える。

「その転校生のおかげでね」

「ええ」

「けれどさ」

トラはここで沙世に言ってきた。

「嬢ちゃんも頑張りなよ」

「私も？」

「そうさ、芝居ってのは一人じゃできないんだ」

「それはわかってるわ」

「わかっているなら話は早い。約束したよね」

「頑張るってことだよね」

「その約束、守ってくれよ」

トラは沙世の目を見て語り掛ける。

「そうしたら」

「そうしたら？」

「きつといいことがあるからさ」

「いいこと」

その言葉に首を少し傾げさせる。

「何かしら」

「所謂ハッピーエンドさ」

トラは笑ってこう述べた。

「嬢ちゃんにもあるかもね」

「お芝居の成功ね」

「まあそんなところさ」

（隠してきたかな）

トラは沙世の顔を探りながら心の中で呟いた。

（だとしたら嬢ちゃんも中々侮れないな）

「私だってやるんだから」

沙世は意を決した笑みをトラに見せて言ってきた。

「見ていてよね」

「自信があるんだね」

「だって。毎日遅くまで練習したし。もう台詞の端々まで覚えてるわ」

そこまでやって自信がない筈がなかった。練習こそ自信の源というわけである。

「やってやるからね」

「ああ、それじゃあな」

「ええ」

沙世とトラは頷き合う。そして。初演へと向かうのであった。

上演場所は学校の体育館であった。場所自体はいつも練習している場所と同じである。

違うのは観客がいるということである。全校の生徒の前で沙世達は愛の妙薬を演じていた。

「アディーナ、愛しているんだ」

「私なんかを好きになっても無駄よ」

舞台の上でネモリーノを演じている澄也がアディーナを演じている沙世に語り掛けていた。

「他の人にあたってみたらどう？」

「そんな・・・・・・・・」

「ふうん」

トラも体育館に来ていた。魔力で姿を消してそれを眺めている。

「確かに。これは人気が出るよ」

澄也を見て言う。彼は舞台姿もさることながら見事な演技を見せていたのだ。

「将来役者になれるかもな。嬢ちゃんも」

沙世も中々見事な演技を見せていた。二人は舞台の上では息の合った芝居を見せていた。

トラはそれをじっと見ていた。だがここでふと思った。

「これは使えるな」

二人の芝居を見て呟く。

「上手く使えば」

二人の仲が進むかも。そう思ったのである。

あらためて芝居を見直すことにした。じっと息をこらして見る。

芝居はその間に進んでいく。インチキ薬売りが出て来て彼からネモリーノが薬を買い。実は安物のワインの薬を飲んで酔っ払ったネモリーノが強気に出たらアディーナが仕返しに村に来ている軍人の一人と結婚すると言いついて大騒ぎに。あれよこれよという間に話が進んでネモリーノはアディーナの本当に気持ちを知らることとなった。

「彼女は僕を愛しているんだ。僕はこれ以上何を望むっていうんだ？」

「歌じゃなくてもいい場面だね」

トラは澄也が舞台の上で語るのを聞いて満足した顔で頷いていた。この愛の妙薬はオペラでは今の場面、『人知れぬ涙』が歌われる場面こそが最もいい場面なのである。このオペラの中で最も有名な歌でありこれを聴く為に来る客も多い。言うならば最大の見せ所である。

そこで彼は見事に演じていた。トラも感心する程に。それを見て

観客達に見惚れていた。

「さてと」

それが終わったところでトラは身構えた。

「いよいよだな」

ネモリーノとアディーナが互いの愛を確かめ合う場面だ。トラはその場面で仕掛けるつもりであった。だからこそ身構えてきたのである。

いよいよ。ネモリーノとアディーナが舞台の上に現われた。そして芝居に入る。

「受け取って、これを」

アディーナはネモリーノに対して言う。その手には契約書がある。

「もう貴方は自由なのよ」

「自由って？」

ネモリーノは薬売りから薬を買う金を手に入れる為に軍に志願していたのだ。彼の本当の気持ちを知ったアディーナはそれを払い戻したのである。

第八章

「そして。さようなら」

「えっ!？」

ここで愛の告白があるかと思ったネモリーは彼女から別れの言葉を告げられて戸惑う。

「何だよ、それ」

「だって。何も言うことはないから」
アディーナは言い返す。

「だから。さようならなのよ」

「ちよつと待ってくれよアディーナ」

ネモリーノはアディーナを呼び止める。ここだった。

「よし」

トラはちよいと魔力を舞台に送った。すると。

「あっ」

アディーナを演じる沙世がこけかけた。それを。

ネモリーノを演じる澄也が受け止めた。当然ここはシナリオにはない。

「えっ」

「あの」

二人は思わぬことに顔を見合わせる。次の言葉が出ない。
だがここで。澄也がアドリブを効かせてきた。

「アディーナ、気をつけて」

彼は言った。

「この道は危ないんだ。君に若しものことがあったら」
「若しものことがあったら？」

半分アディーナから沙世になっていた。

「僕はどうしていいかわからなくなるんだ。だから」

「側にいて欲しいの？」

「その通りさ」

ネモリーノは答えた。

「だから。行かないで」

「私のことが好きだから？」

「ずっと前から言っているじゃないか。だから」

「わかったわ」

その言葉にこくりと頷く。それからゆっくりと態勢を元に戻す。

「一緒にいましょう、ネモリーノ」

「アディーナ」

「そしてね」

今度はアディーナ、いや沙世がアドリブに出て来た。

「幸せに」

すっとネモリーノ、いや澄也に抱きついてきた。

「えっ」

（続けて）

沙世は澄也にそっと囁く。

（お芝居を続けて）

（う、うん）

澄也は最初それに戸惑っていたがそれにこくりと頷いた。

（わかったよ。それじゃあ）

（お願い）

二人の囁き合いは誰にも気付かなかった。すぐに芝居に戻った。

「幸せになりました」

「二人で」

「そう、二人で何時までも」

「そうだね。僕達はもう離れないよ」

「ええ」

澄也も沙世を抱いてきた。彼も段々と感じていたのだ。

背中に手を回した時にそっと囁いてきた。

（いいよね）

耳元で。沙世にだけ聴こえるように。

(いいわ)

沙世にしてみれば夢みたいなことである。これを断ることはしなかった。静かに微笑んでそれを受け入れたのであった。

(このままずっといさせて)

(ずっと?)

(そう、ずっと。いいかしら)

(うん、いいよ)

その言葉の意味はわかっている。そのうえでこくりと頷いたのであった。

(お芝居が終わってもね)

(ええ)

「凄い熱演だなあの二人」

観客達はそんな二人に気付くことなく舞台をうっとりとして見ていた。

「そうだよな、役になりきってるぜ」

「あれ一年の片桐と若松だったよな」

「ああ、そうだぜ」

「一年とかそういう問題じゃねえぜ。ありや凄い」

「こんな舞台そうそうお目にかかれないよな」

「ああ、見に来たかいがあったぜ」

「全くだぜ」

彼等は口々に言い合う。だが舞台の上での本当の出来事には気付いていない。気付いているのは一匹だけ。トラだけであった。

第九章

「これでよし」

トラは舞台の上で抱き合う二人を見て満足した笑みを浮かべていた。

「嬢ちゃんも思いが適って何よりだ。さて後は」

用事が済んでも彼は帰ろうとはしなかった。

「最後まで見るか。じっくりとな」

どっしりと座り込んで姿勢を直して観はじめた。それでも芝居は好きなのである。

「阪神もいいがこっちもな」

そのまま芝居を楽しんだ。最後のカーテンコールまで堪能したのであった。

愛の妙薬の舞台が終わってから沙世は変わった。澄也と付き合うようになったのだ。

「上機嫌だね、最近」

「だって若松君がいるもの」

沙世はトラの言葉ににこにことして答える。

「機嫌悪くないわけじゃないじゃない」

「どう、彼は」

「すつごく優しいのよ」

「そうか、それはよかった」

それを聞いて安心した。悪い男や悪い女に惚れるということはある話だ。惚れた相手のことはまあおおよその見当がついていたがそれが当たって何よりであった。

「じゃあ満足してるんだね」

「勿論よ」

顔はにこにこしたままである。

「こんなに幸せになっていいなんて信じられないわ」

「ちょっとそれは言い過ぎなんじゃないか」
おのろけが過ぎる沙世を嗜めた。

「だってこんなのはそこいらにあるものだし」

「それでもいいのよ」

「おやまあ」

これにはトラも少しびっくりだ。啜っていた煙草を落としそうになる。

沙世はトラが思っていたよりも純真で一途だった。しかも欲がない。それにあらためて好感を覚えると共にこれからのことに不安も感じたのである。

（この嬢ちゃんはまだまだ見守らないと駄目だな）

目を細めて心の中で呟く。

（危なっかしいや、全く）

「どうしたの、トラ」

沙世はそんなトラに顔を向けて尋ねてきた。

「何かにやにやして。昨日阪神負けたのに」

「負けたけれど見るべきものがあつたからさ」

そう答えて誤魔化する。

「負けても何か得られるものがあればそれでいいさ」

「そうなの」

「そこが巨人なんかと阪神が違ふところなんだよ。阪神は負けてもそこに何かがあるんだ」

いつもの論を述べる。

「いいか、野球はそれなんだ」

「そうなの」

「何だってそうだけれどな」

そして話を修正してきた。

「恋だってな」

「若松君とのことも失敗があるってこと？」

「きつとあるさ。けれどな嬢ちゃん」

顔を見上げて沙世を見る。

「何があっても心配するな」

そしてこう言った。

「俺がいるから。いざとなったら相談に乗るぜ」

「乗ってくれるの？」

「当たり前だよ。嬢ちゃんの為なら」

右の前足で胸をドンと叩いて言う。

「例え火の中水の中だ」

「それじゃ頼りにさせてもらうね」

「おうよ」

口調が江戸っ子のもになってきていた。

「だから安心しな」

「うん」

沙世はその言葉ににこりと頷いた。

「じゃあこれから何かあったらお願いね」

「任せておけよ。大船に乗ったつもりでいてな」

「猫又が側にいる気持ちでね」

「おっと、こりゃ」

ぺん、と自分の額を前足で叩いた。

「一本取られたかな」

「仕草は人間そっくりなんだけれどね」

「ははは、まあそういうことでこれからもな」

「ええ、お願い」

沙世とトラはニコリと笑い合った。トラは沙世の笑顔を見ながらこれからも一肌も二肌も脱いでいくかと密かに思うのであった。

猫又 完

2
0
0
6
.
9
.
1
9

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3523f/>

猫又

2010年10月8日15時48分発行